
ピアノレッスン

kanon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピアノレッスン

【Nコード】

N6014X

【作者名】

kanon

【あらすじ】

涼介は大学受験を目指す、予備校生。四月から全寮制の予備校に通っている。門限は夜の九時で、三食の食事付き。そう聞いたときは窮屈で退屈な一年間を想像していた。しかし。初めての一人暮らしは意外に自由で、密かな楽しみも、できた。

毎晩隣のマンションから聞こえてくるピアノは、勉強で疲れた涼介の心を癒してくれる。『どんな人が弾いているんだろう』『一度でいいから、その姿を見たい』。どんどん、姿の見えない人物に惹かれていく涼介。気になるあまり、その人物を突き止めようとす

るが……。

寮生活の始まり

隣のマンションから、ピアノの音が聞こえてくる。聞いたことのない曲ばかりだったが、あまりにも情熱的な演奏に、思わず心を奪われてしまう。演奏している本人の姿を見たことはない。音大を受験する女子高生か、それともピアニストを目指す女子大生か。十八歳男子の乏しい想像力では、その程度の人物像しか浮かばなかったが、たとえ深夜に聞こえてきても全く苦にならないほどの技術を持っていることだけは、間違いない。

今年の四月、正確には三月の中旬、大学受験に失敗したことが確定した涼介は、父親の勧めで全寮制の予備校に入った。というのも、実家は中途半端な田舎で近所にまともな予備校がなく、通うとなると朝五時起き。両親への負担も自分への負担も大きいと判断した涼介は、相当気がすすまなかったが、父の言葉に従った。

「涼介、解ってると思うけど、受験のためにここに入るんだからな」面接兼、寮の下見に訪れた際、父親はそう釘を刺した。都会は何かと誘惑が多い。大学時代を都会で過ごした父の口癖だ。本人も相応な誘惑に翻弄されたのだろう。父が選んだこの予備校は、門限など生活面でも厳しいことで有名で、規則を守れそうな生徒かどうかを、まず面接で確認するということである。母親譲りの柔らかい顔立ちのおかげか、それはすんなりと突破できた。

「寮母さんが三食作ってくれるし、夜中に出歩くのも禁止。これなら無駄遣いのしようがないな」

仕送りも少なくてすみそうだと父親が笑う。恐らく、そんな自由のない生活に嫌気がさして、さっさとここを出て行くために、皆勉強に励むようになるのだろう。その時の涼介は、勝手な想像をして溜め息をつき、絶対に一年で終わらせてやる、と心に誓った。

ところが、寮に入って一ヶ月が過ぎた頃。既に親しくなった戦友

たちと食堂で夕飯を共にしながら、意外にも心地良さを感じている自分に戸惑っていた。まず、親の小言がない。これは皆が共通して感じる開放感だった。そして、食事が文句なしに美味しい。割増料金もとられず、おかわり自由。寮母の西川秀子は五十代半ばの典型的なオバさんタイプで、小柄で小太り、いつも元気で感じがいい。皆、秀子さん、と名前で呼んでいた。

そして、……ここからは自分だけだろうが、夜、机に向かっていると、何処からかピアノの音色が聞こえてくるのだ。涼介自身はピアノを弾いたこともないし、家族の誰もそんな高貴な趣味などなかったが、聴いていると不思議と心を癒される。はじめのうちは、近くにピアノ教室でもあるのかと思っていた。しかし、その音は深夜になっても聞こえてくることがある。そして、弾き手は、一人。

『どんな人が弾いてるんだろう』

繊細で、かつ情熱的なピアノに、涼介の想像は止まらない。日を追うごとに、あやふやだったそのシルエットは、年上の髪の長い女性の姿になった。鍵盤の上を滑る、細い指が思い浮かんだ。一度でいいから、その姿を見てみたい。涼介は魔法にかかったように、彼女のことばかりを考えるようになっていた。

食事を終え、真っ直ぐ部屋に帰りなさいね、という秀子の声にだらけた返事をした涼介は、携帯の時計を確認した。まだ門限の九時まで一時間以上ある。

「俺、ちよつと外歩いてくる」

いつものように友人たちにそう声をかけ、涼介はいそいそと寮を出た。

会社帰りのサラリーマンが、駅へと急ぐ姿。予備校帰りの生徒が、携帯の画面を眺めながら歩いている姿。涼介が生活する寮は、駅裏の比較的大きな通り沿いにある。予備校はその隣の建物だ。

涼介は、寮の西を流れる川を挟んだ、八階建てのマンションの前に来ていた。ピアノの音が聞こえるのは、この方角に違いない。そ

う思っていたから。涼介にとって、ピアノの弾き手を突き止めることは、既に楽しみみの域に達している。日課といってもいい。男ばかりの寮生活で、クラスも理系。数少ない女子と触れ合うことなど皆無に近いため、余計に執着してしまうのかも知れない。……今日こそは、その姿を確かめたい。

ピアノの音が聞こえる時間帯を研究した結果、平日の、門限の九時を過ぎた頃から。ということは、何らかの定職についているか、学校へ通っているかのどちらかだと推測できる。

涼介はいつものように、橋の上に移動して欄干に凭れ、携帯の画面を見ているフリをしながら、通り過ぎる人影を観察した。帰宅ラッシュの時間帯で人通りが多かったが、立ち止まっている人の姿はなく、誰もが急ぐように足を動かしている。皆、目的地があるのだろう。自分には、こんなに急いで向かう場所なんてないな。そんなことを考えながら、マンションに入っていく人影を探す。しかし、明らかにスーツ姿の男性ばかりで、若い女性は皆、駅のある方角へと消えていった。

五月に入って気候も良く、夜風も心地良かったが、門限が近づくとつれ、何だか寂しいような感傷的な気分になってくる。あと十分あと五分。涼介はそこであきらめて、マンションに背を向けた。その時。

コツ、コツ、コツ、コツ、と、ヒールの音が横を通り過ぎる。フワツと届く薔薇の香り。反射的に振り返ると、ブランドもののトートバッグを肩にかけたOL風の女性が、マンションの入り口に消えるところだった。後ろでまとめた髪と、スラリとしたパンツスーツ姿がよく合っている。

「……………」
胸が、破裂しそうにドキドキ音を立てた。

彼女に会うために

寮の食堂は、講師たちも利用する。予備校の講師は人気商売とあって、授業以外の時間も気さくに寮生と話をした。特に物理講師の村上は、まだ二十代と若く話題も豊富で、男女問わず予備校生に人気だった。

「先生、隣のマンションに引っ越したんだって？」

秀子が厨房から声をかける。情報が早いな、と村上は驚いたように笑った。

「実家から通えなくもないんだけど、渋滞が酷くてさ。毎日ハラハラするくらいなら、思い切って引っ越そうと思ったんだ」

隣のマンション、と聞いて、涼介の耳はその会話に釘付けになる。家族向けの分譲から、一人暮らし用の賃貸まで、部屋も家賃も様々だそう。東の角部屋は高くせに空きがない、と、空いていたら借りるつもりだったような口振りに、

「予備校の講師って、そんなに儲かるの？」

誰かに尋ねられ、冗談だよ、言ってみたかっただけだよ、と怒ったように返すのも面白い。涼介はその会話に便乗して、

「女の人の一人暮らしも多いの？」

そう尋ねてみた。

「ああ、多いと思うよ。デザイナーズマンションっていう売りだから。俺としては、そんなお洒落じゃなくてもいいから、家賃を安くして欲しいけどね」

それでも近さに負けて、契約してしまったらしい。確かに、これ以上近いマンションはなさそう。おまけに寮の食事付き。

一人暮らしのOLか……。その魅力的な響きに、しばらく食事をする手が止まっていた。それを、すかさず見つけて友人の敦司あつしが指摘する。彼は部屋が隣で、隠れて一緒に酒を飲んだりゲームをしたりする仲だ。

「クラスに女子が少ないからって、手当たり次第は良くないと思うぜ？」

その言葉に、涼介は敦司を睨んだ。

「手当たり次第って何だよ？ 俺だって、誰でもいいわけじゃないんだよ」

すると、敦司はにやり、と笑う。

「じゃあ、ピアノを弾いてる誰かさんだろ」

完全に凶星だったが、再び敦司を睨むと、今度はそれを聞いていた村上が口を挟む。

「ああ、ピアノ弾いてる人、いるよな。ここまで聞こえてくるってことは、こっち寄りの部屋なんだな」

敦司のせいで、詳しくは尋ねられなかったのは残念だったが、あのマンシヨンにピアノを弾く人物が住んでいることは確認できた。涼介はそれだけでも満足して、憎らしい友人と共に部屋に戻った。

今日も、ピアノの音が聞こえている。曲は、穏やかな和音に始まり、徐々に独立して流れ出した。それはまるで隣を流れる、夜の川のように感じられ、しばし、窓から見える景色を眺める。月が明るい夜だ。静かでゆったりとした流れはその光を映し、揺らぎながら河口へと運んで行く。

涼介は物理の参考書を開いていたが、もう一時間ほど同じページのまま、その内容を見るでもなく、過ごしていた。どうしてこんなにも、惹き付けられるのだろう。ただの音なのに。涼介は懸命に、その誘惑から逃れようとしてみた。しかし、勝手に、体の中に流れ込んでくる。もっとも、窓を閉めようとしないうちに、完全に逃れる気はないのだったが。

「俺、このままだと確実に二浪だよ」

勉強の息抜きなのか、暇を持て余したのか、部屋を尋ねて来た敦司に、そう打ち明けた。姿の见えない相手に恋をしまっている現実。後ろ姿だけは確認したけれど、その中途半端さがかえって涼

介を惹き付ける。

「気になって、何も手につかない。何かいい方法、ないかな」

「……ないこともないけど」

敦司はそう言いながら、窓際に寄り、腕組みをする。さっきの穏やかな曲は終わり、今度は甘いメロディが流れ始めた。

「確かに、プロ並みの腕だな。きっと楽譜見ないで弾いてるぜ」

この曲、難しいのに、と呟く。どうしてそんなことが解るのか、不思議に思っていると、

「俺も、中学まで習ってたから」

そんな意外なことを言つて涼介を驚かせた。敦司は引出しの数が他の友人たちに比べて格段に多い。まだまだ涼介の知らない面を持つていそうで、底知れないとも思う。精神年齢が相当高いのかも知れない。時々、本当に同じ年かと疑うような発言をした。

「……で？ いい方法って？」

急かすと、敦司はニヤニヤしながら、まあ、焦るな、と涼介をなだめる。完全に上に立たれて腹立たしいが、何も思い付かない自分が悪いのだ。そこは、ぐつと堪えた。

「休みの日に、村上の部屋に遊びに行く。そして、ピアノが始まったら、その音のする部屋を探すんだ」

しかし、そうするにはまず、村上に事情を打ち明ければならない。第三者というか、予備校関係者に知られることだけは避けたいと思った。不真面目な行為と受け取られかねない。首を縦に振らない涼介に、敦司は仕方ないな、というように軽く息を吐き、

「それが、あのマンションの入り口にさ、張り紙するんだよ。ピアノを教えてください、って」

ピアノを本気で習う覚悟があるんだったらね、と付け加える。その奇抜なアイデアに驚いた涼介は、マジマジと敦司の顔を見つめた。それ以上に良い方法はないように思える。

「おまえ、すごいな」

「まあね」

そう言いながら、涼介の机の一番下の引出しを指差す。ここにビールを隠しているのを知っているのだ。敦司は見た目も随分大人びていて、コンビニで堂々と酒を買う。涼介の引出しの中身も、敦司が買ってきてくれたものだった。

「二本で勘弁しといてやるよ」

勝手に開けて、缶ビールを二本取り出した敦司は、頑張れよ、と涼介の肩を叩いて部屋を出て行った。最初からビールが目的だったのだ。彼の部屋には小型の冷蔵庫が持ち込んであり、涼介もそれを使わせてもらっている。今からさっそく冷やすつもりなのだろう。その背中を見送ったあと、涼介はおもむろにルーズリーフを一枚取り出し、

『ピアノを教えてください先生をさがしています。全くの初心者です』
できるだけ丁寧な文字で書き、その裏に携帯のアドレスだけを記入した。名前や番号を入れて、悪戯があっても困る。

ピアノを習いたいわけでもないのにこんな張り紙をすることに、若干の抵抗はあった。しかし、どうしてもピアノを弾いている人物を確かめたい。涼介の気持ちはもう完全に、彼女への恋心だったが、弾き手が気になって勉強が手につかないのも事実。これは、受験に失敗しないためにも、必要なこと。涼介はそう自分に言い聞かせて、もう一度その紙を眺めた。

ドキドキの時間

翌日の昼休み、涼介は、女子から借りた可愛らしい水玉模様のマスキングテープで、マンシヨンの硝子戸にルーズリーフを貼付けた。これも敦司の入れ知恵で、女子と思わせれば警戒されることもないから。騙すように気が引けたが、それよりも一度会ってみたいと思う気持ちが勝った。

「でもさ、涼介が見たOL風の女だとは、限らないじゃん」

期待に胸を膨らませている涼介に、敦司が水を差す。

「いや、間違いないよ。あのあと部屋に戻ったら、ピアノの音が聞こえてきたし」

そうでないかと、困る。涼介が会いたいののは、あの子の彼女なのだから。今までは理想の女性像など描いたこともなかったが、彼女の姿を見てから、それが理想になってしまった。自分を飾りすぎず、加えて上品な女性らしい香り。

「デキる女、って感じだったな。やたらと髪を巻いてないところがいいよ」

今どきの女子は、それが決まりであるかのように、どこかしら髪をカールさせている。別にそれが嫌いなわけではなかったが、自然な曲線を描く髪を無造作にしばった髪型に、好感を持ったのだ。

「賭けようぜ。もし、涼介が見たっていう女だったら、こないだのコーラを倍にして返してやるよ。でも違ったら、引出しの中身は全部俺のもの」

休憩を終えた講師が教室に入ってきたのを見て、ビールをコーラと言い換えたのだろう。敦司は抜け目がない。妙に自信のあった涼介は、了解、と返事をした。

ところが今度は、落ち着かない。相手は社会人なのだから、こんな時間に連絡が入ることはないと解っていても、携帯から目が離せなくなってしまう。小学校のときに担任の先生を好きになった時

以来の気持ちだ。同級生を好きになるのとは全然違う、緊張感が苦しい。思えば、今まで本気で好きになったのは、自分より年上の女性ばかり。手が届きそうで、届かない。届かないようで、届きそう。その距離感が、涼介の心を惹き付けるのかも知れない。何度も溜め息をつく涼介に、隣の席の友人が、気分でも悪いのかと声をかけてきた。似たようなものだと思った涼介は、頷いて、そのまま机に伏せた。

「ダメだ。全然食欲がないよ」

夕飯も、ろくに喉を通らない。事情を知っている敦司だけが薄笑っているが、他の友人たちは心配そうに見ている。

「俺、先に戻るわ」

食えることをあきらめて、涼介は自分の部屋に戻った。備え付けのベッドに身を投げ、頭を抱える。……本当に、連絡が来るのだろうか。もし、万が一連絡が取れたとして、一人暮らしの女性の部屋に上がり込むことなど、できるのだろうか。もし、入れてもらえたとして、二人きりで、ピアノの前で……。

想像し出すと止まらなくて、涼介はそのいかがわしい妄想を掻き捨てるように、勢い良く起き上がった。すると、部屋のドアをノックする音。ということは、敦司ではない。彼はいつも、勝手に入ってくるから。涼介はドアを開けた。

「あ、……宮間くん、大丈夫？　なんか、具合が悪いつて聞いて」
同じコースの北川 真子まこだった。数少ない理系女子の一人。成績優秀で、一つ上のクラスに移るとい話が出ている。

「これ、良かったら、食べて。こういうのだったら、食欲なくても食べれるでしょ」

差し出されたのは、コンビニの袋に入った、ヨーグルトだった。飲み物も入っている。

「……ありがと。でも、いいの？」

「うん。自分のは別に買ってあるの。じゃあ、お大事にね」

真子はそう言って、走って帰って行った。女子寮は別棟で、同じように門限があるからだ。涼介はしばらく立ち尽くしていたが、思い立って、隣の敦司の部屋をノックした。

「ちょっと、冷蔵庫貸して」

「真子ちゃんからの差し入れ？」

「……何で知ってたんだよ？」

全く、敦司に知らないことはないかと思えてくる。

「たった今、廊下で会って部屋を聞かれたから」

涼介は納得して、小さな冷蔵庫にもらった袋ごと入れる。先日奪われたビールはもう跡形もなかった。

「で、連絡あった？」

「ないよ、まだ」

「まあ、今日は金曜だからな。OLは合コンか女子会ってところだろ」
「……」

やはり、つい最近まで高校生だったとは思えない。半ば呆れていると、彼はようやくそのわけを説明してくれた。

「歳の離れた姉貴がいるんだよ。ごく普通の企業のOLで、容姿も並だけど、週末はいつも終電まで帰ってこない」

敦司の並外れた知識量は、家族構成にあるらしい。知識と言っても、余分な、とつく種類のものだったが。

何処にいても落ち着かず、部屋に戻って時計を見ると、午後九時過ぎ。ピアノの音は、まだ聞こえてこない。涼介は再び息苦しくなってきた、ベッドの上で膝を抱えた。……どんな人だろう。優しい人だろうか。男性並みに仕事をこなすキャリアウーマンだったとしたら、レスンも厳しいかも知れない。綺麗な女性にきついことを言われるのは、どんな気分なんだろうか。意外に、快感だったりして。そんなことを考えてしまう自分に呆れては、時計を見る。期待と不安に翻弄されながら、涼介は時間が過ぎるのを待った。

年上のOL？

何か音が聞こえた気がして、目を開けた。蛍光灯の光が眩しくて、何度も瞬きをする。明かりをつけたまま眠ってしまったようだ。時計を見ると、深夜二時を回っている。今から風呂に入るか、明日の朝にするかを悩んでいた涼介は、ふと、携帯に目をやった。ランプが、点滅している。一気に目が覚め、心臓が倍速で打ち始めた。

『ピアノ講師の件ですが、私で良ければお任せください。ご都合をお覗いたいので、後日改めてご連絡さし上げます』

その丁寧な文章の下に、電話番号と、フルネームが書いてあった。奥村葉月。はづき、と読むのだろうか。あのキリツとしたスーツ姿にピツタリで、ますます惹き付けられる。嬉しさと怖さが同時に浮かんで、携帯を手に、ベッドの上で足をバタバタさせた。

しかし。こんな時間まで出歩いていたのだ。敦司が言っていたように、合コンか、それとも既に恋人がいて、デートだったのかも知れない。まだ会ったこともないのに、急に嫉妬心が沸いてくる。

『会ったら、一目惚れですって言おう』

相手がいたって、構うもんか。涼介は自分でも驚くほど強気になって、布団を頭からかぶった。

土曜日の授業は、午前中だけ。午後は全国的に人気のある有名講師を招いて、有料の講習会などが行われるが、参加は自由。主に、現役の高校生で席が埋まっていると聞いた。勿論、今日の涼介は、そんなものに出ている暇も余裕もない。

「いいなあ。なんか、羨ましくなってきた」

涼介の緊張した様子を見て、敦司が言う。

「俺もそうなの、味わってみたよ」

「……おまえ、彼女いるからいいじゃん」

「年上ってというのが、羨ましい」

年上、と言われて、ますます緊張が高まってきた。よく考えてみれば、相当、上かも知れないから。大卒で社会人一年目だったとしても、二十二歳。自分より、四つも上だ。

「俺はもつと上だと思うな。だって、隣のマンション、家賃高いって言ってる？ 二十万そこそこの給料じゃ、住めないって」

あのととき村上は謙遜してたけど、と付け加える。一般的な会社員の給料がどれくらいなのか、涼介には見当もつかなかったが、敦司が言うのなら間違いのない気がする。そんなに歳の離れた女性と話したことは、ここ最近一度もないのに。

「やめてくれよ、これ以上緊張したら、吐いちゃうよ」

昨日に引き続いて食欲のなかった涼介は、朝食に真子からもらったヨーグルトを食べただけで、胸が一杯になってしまった。当然昼になってもそれは続いていて、今は美味しそうにトンカツ定食を食べる友人たちを眺めている。

「涼ちゃん、まだ具合悪いの？ お粥でも作ってあげようか？」

厨房から秀子が声をかけた。

「だから、その呼び方やめてよ。息子じゃないんだから」

涼介が咎めると、だって可愛いんだもん、とやめる気配がない。母親にも未だに涼ちゃん、と呼ばれていたが、それを知られているような気がして、何だか恥ずかしい。

「お粥も食べれないよ、きつと。こいつのは、恋の病だから」

信じられないセリフを大声で言っつて、敦司が笑う。

「なんだ、それなら仕方ないね。年頃だもんね」

可愛いんだから、とニヤニヤしている。穴があつたら入りたい、とは正しくこの状況のことだ。誰が好きなんだ、という友人たちの声に聞こえないフリをして、涼介は自分の部屋へ逃げ込んだ。

『連絡ありがとうございました。土曜日か日曜日の午後が都合がいいです。よろしく願います』

午後三時を回っても連絡がないことに焦れた涼介は、奥村に返信

してみた。何より、このままでは本当に具合が悪くなってしまう。
こんなにも長い間心臓がドキドキしていたら、体に悪い。すると、
今度は驚くほど速く、返信があった。

『差し支えなければ、教材などの打ち合わせも兼ねてどこかでお会
いしたいのですが、お住まいはどちらですか？』

『すぐ、そばです。窓からマンションが見えます』

『では、橋のところまで今日の十六時に、お待ちしています。奥村』

今から？ 心の準備がなくて、ますます心臓が大きな音を立てた。
いても立つてもいられなくなり、取りあえず、隣の部屋に飛び込む。
「何だよ？ そんなに慌てて」

「今から、会うことになったんだ。どうしよう、」

「良かったじゃん。頑張れよ」

「頑張るけどさ、……」

涼介はチラッと壁の時計に目をやった。あと、三十分。あと三十
分で……。

「大丈夫だよ。おまえ可愛いから、きつとOKしてくれるよ」

そんなセリフに腹を立てる余裕もない。この顔のおかげでうまく
いくなら、両親に感謝したいくらいだ。

「それに今どきのOLは、肉食系に飢えてるから。押しに弱いと思
うぜ」

こうなってくると、社会人の姉がいる敦司の言葉が、神の言葉に
聞こえる。絶対うまくいくから、自信持って行けよ、と散々励まさ
れて、涼介は少し早いが、寮を出た。

休日の駅裏は、のどかなものだ。涼介は自分を落ち着けようと、
辺りの景色を眺めてみた。川の遊歩道では、マンションの住人が子
供を遊ばせたり、犬を連れて散歩をしていたりする。普段はスーッ
姿で通勤するおじさん連中も、ジャージでウォーキングを楽しんで
いた。すっかり青葉に覆われた桜の木が、涼し気な木陰を作り出し、
その下のベンチで読書をする女性の姿……。

あの時の女性に、似ている。そう思って橋の上から凝視している

と、彼女も顔を上げた。この距離で気付かれることはあり得ないと思っただが、彼女は腕時計を確認するような仕草をして立ち上がり、脇に置いたトートバッグに本を入れて、堤防の階段を上がってきた。どうやら涼介に気付いたわけではなかったようで、彼女はマンション側の橋のたもとで立ち止まり、欄干を背にした。間違いなく、あの時の女性だ。休日なのに、きちんとスーツに身を包んでいる。涼介は、どう声をかけるべきか迷って、考えを巡らせた。奥村さんと呼ばれば良いのか、それとも……。

迷っていても仕方ない。時計の針は、まもなく十六時を指そうとしている。涼介は思い切って彼女のほうへ、近づいて行った。

「あの、」

声をかけると、往來を眺めていた彼女が、涼介のほうを向いた。思ったより長身で、想像を遙かに上回る美貌に驚いてしまう。風に乗って、あのとときの香水が香った。もう、心臓が口から出そうなほどドキドキして、言葉が出てこない。そんな涼介の前で、彼女は目をパチパチさせていたが、やがて、

「……男？」

そうか、それで驚いたのか。すっかり忘れていたが、女と思わせるために姑息な手段を使ったことを思い出す。謝るべきか考えていると、彼女は意外にも、可笑しそうに笑った。笑顔がまた、可愛い。「なーんだ、可愛い女子高生にピアノを教えれると思って、楽しみにしてたのに」

え？ 涼介は自分の耳を疑った。こんなにも美しい女性の口から聞こえる言葉ではないと信じたい。

「まあ、いいや。ちょっと行ったところに珈琲ショップがあるから、そこで話そう」

疑問は解消されないまま、涼介は謎の人物のあとをついて行った。

ようやく元通り

「ケーキとか、頼んでいいよ」

驚くほどこくだけた態度に、だんだん、緊張の糸がほぐれてくる。

声だけ聞いていると、中性的。男にしては高いが、女にしては、低い。涼介は急激に、熱が冷めて行くのを感じていた。

「甘いもの、好きじゃないから」

「へえ。好きそうに見えるのに」

草食系らしくないな、と呟く。

「草食系じゃないし」

さすがにムカツときた涼介は、そう言い返した。確かに柔らかい顔立ちなのは認めるが、性格や嗜好まで見た目で判断されたくない。すると奥村は悪びれるふうもなく、

「最近、多いんだよ。ピアノを習いたがる男の子が」

悪いことじゃないけど、男子はもっと外で遊んだほうがいいのにな、と同意を求めてくる。自分もピアノを弾くくせに、と思いがながら、それほど飲みたくもない珈琲を注文した。

「あの、一つ確認してもいいですか」

席に着くなり、涼介は口を開いた。

「女の人じゃ、ないですよね」

すると、奥村は珈琲を吹き出しそうになる。何とかそれを飲み込んで、

「なるほどね。そっちはそっちで、下心があつたつてわけか。残念でした」

可愛い顔で憎たらしい言い方をして、また珈琲を飲む。カップを持つ指が綺麗で、本当に女性のようにだ。そんなことを思っていた涼介は慌てて、

「ち、ちがうよ。ピアノを教えて欲しいって思ったただだよ。あんまり、上手だから」

動揺のあまり、敬語を忘れてしまった。

「君、もしかして隣の予備校生？」

涼介は憮然と頷いた。毎日、どんな綺麗な人が弾いているのかと思いを巡らせていた自分が、バカみたいだ。綺麗な人、には違いがないが。あまりにガツカリしたせいかな、やけに珈琲が苦く感じる。しかし、子供扱いされたくなくて、砂糖もミルクも足さなかった。

「せっかく、綺麗なお姉さんに会えると思って来たのに」

もうどうでも良くなった涼介は、相手の言いたい放題な調子に合わせてそう言ったあと、一度、橋の上ですれ違ったことを話した。どう見ても、女性だった。

「髪が長くて、香水の匂いがしたら、女だって決めつけるの？ 単純だね」

その言いように、また、腹が立つてくる。言い返す言葉が見つからずに黙っていると、

「ま、下心はお互い様だし。仲良くやろうよ」

そう言って涼介の肩を、ポン、と叩く。フワリ、と良い香りがした。

「綺麗なお姉さん、紹介しようか？ まあ、彼女の場合はピアノじやなくて、フルートだけど。どうせ楽器なんて何でもいいんでしょ？」

思い出すだけで、腹が立つ。意地になった涼介は、ピアノが弾けるようになりたいから先生を探してたんだ、と嘘をつき通した。信じてくれたかどうかは疑問だが、そのあと奥村は、涼介がどの程度の初心者かを簡単な楽譜を見せて確かめ、教材は用意しておくから体だけ来てくれればいいよ、と部屋の番号を教えて帰って行った。その後ろ姿は、やっぱりどう見ても女性そのもの。身長は高いが、線が細いのだ。ウエストがくびれたデザインのスーツに、紛らわしい音のするショートブーツを履いていて、バッグも女性もの。騙そ

うとしているとしか思えなかったが、よく考えれば、騙して本人に何の特もない。涼介は、ただただ自分の不運を呪いながら冷めた苦い珈琲を飲み干し、彼の姿が見えなくなってから、店を出た。

「それは災難だったな」

なんとか夕飯の時間に寮に帰った涼介は、ことの成り行きを敦司たちに話していた。もうすっかり食欲も戻って、今までの分を取り返すかのように、おかわりをする。憤った涼介の話を聞いていた秀子が、涼ちゃんはちよつと抜けてるところが可愛いのよね、と笑った。

「ホントにレッスンを受けるのか」

「そうだよ。来週から、さっそく始めることにした」

下心だけだったとは思われなくて、やめるとは言えなかったのだ。正直なところ、彼のつてで綺麗なお姉さんと知り合えるかもしれない、と新たな下心が芽生えてもいた。

「年上なんて、口うるさいだけだぜ？ 真子ちゃんにしとけよ」

六つ上の姉がいる敦司が平然とそんなことを言う。どうしていきなり真子の名前が出るのか、真剣に悩んでいると、今度は呆れたように、

「もしかして、超鈍感？ 真子ちゃんも可哀相に」

言われて初めて、昨日の差し入れのわけが解った。わざわざコンビニまで歩いて、それほど親しくもない自分のためにヨーグルトを買ってきてくれたわけが。幸い、食堂に彼女の姿はなく、声の大きい敦司を睨むだけに留めたが……。どうやら他の友人たちもとつくに気付いていたようで、ピアノの魔法にかかっている間抜けなヤツだと笑う。

「うるさいな。おまえらもあの姿をしてみるよ。何処から見たって女なんだよ。俺は、騙されたんだよ」

二杯も牛丼をおかわりして、ようやく気が済んだ涼介は、そう言い放って部屋に戻った。開けた窓から、今日もピアノが聞こえている。が……。

「キラキラ星？」

今までの情熱的なイメージからは程遠い、可愛らしい曲名を、思わず声に出してしまった。それでもまだ聴き入ってしまう自分をどうにかしたいと思っていると、突然演奏が止む。そして、メールが届いた。

『そういえば、名前、聞くの忘れた。なんて名前？』

『宮間です』

『宮間、何？』

『涼介』

必要事項だけの、やりとり。最初にメールが届いた時のドキドキを返せ。そう念じながら、送信ボタンを押した。

心の底からガツカリした涼介だったが、そのおかげでようやく授業に集中できる。両親の期待がどれほどのものか定かではないが、自分自身、もう少し勉強ができるはずだと信じたい。私立大ならいくらでも合格できそうなところはあったのに、あえて国立大一本に絞っていた。

朝の八時半から、夕方五時半まで。これでもかというほど勉強させられる。しかし、辛いかイヤだとか文句を言う者はいなくて、ここには目的を持った人間ばかりが集まっているのだと解る。涼介自身も、まだそれほど苦痛を感じてはいなかった。

親元から離れて、という状況も良いのかも知れない。実際、大学は実家から通えない範囲を選ぶつもりだったし、一人暮らし、という響きにも憧れがあった。今は浪人生という肩身の狭い立場でありながら、それに近い自由を既に得ている。

ただ一つ残念なのは、父親が心配していた「都会の誘惑」というものに、まだ出会っていないということ。休日友人たちと出掛けなくても、それほど強く涼介を誘惑するものは見当たらなかった。

「ねえ、今度の土曜日、昼からバーベキューしようと思うんだけど、

予定、どう？」

夕飯を終えて敦司たちと喋っているところへ、真子たちがやってきた。先日の一件から、どうも意識してしまって、目を合わせられない。

「いいねえ。でもさ、それ、日曜にならないかな。ちょっと土曜は都合が悪くて」

チラツと涼介を横目で見ながら、敦司がそんなことを言う。

「それが、今度の日曜の講習会に出る子が多くて。土曜なら誰もいなかったから」

敦司は涼介の予定のことを言っているのだ。意地で始めることになった、ピアノのレッスン。

「俺だったらいいよ。もし用事が早く終わったら行くようにするし、あえて用事、と言っておいた。むやみに自分の情報を広げることもない。」

「じゃあ、場所聞いといて、タクシーで来いよ。な？ 涼介」

有無を言わせず、といった口調で敦司が言う。涼介は仕方なく頷いた。

「何意識してんだよ？」

部屋に戻るなり、敦司がからかう。

「おまえのせいだろ？ 変なこと言うから、」

「変なこと、じゃなくて、事実を言ったんだよ。そうやって意識してるうちに、好きになるってパターンだな」

王道だけど、と面白そうに笑う。

「恋愛くらい、自由にさせてくれよ」

呟きながら、ふと時計に目をやる。今さら気付いたが、もう癖になっってしまったのだ。涼介は大きく溜め息をつきながら、軽く頭を振った。

「そついえば、例の賭け、一応俺の勝ちだろ？ ビール寄越せよ」
思い出して、涼介は冷蔵庫に手を伸ばした。すると敦司が素早く

それを遮る。

「ダメだよ。男だったんだから」

「でも、同一人物だろ？」

「じゃあ、一本返してやるよ」

敦司はそう言つて二本取り出し、一本を涼介に差し出した。さつそく開けて、二人して飲む。いつものピアノが流れてきたことに気付いて、顔を見合わせた。タイトルは解らないが、相変わらず、情熱的な演奏だ。

「マジで彼女、作んないの？ 真子ちゃん、オススメなのに」

敦司がそう言うなら、多分間違いないのだろう。しかし、涼介は首を横に振つた。

「自然にそうなりたいんだよ。くつつけられるとか、そういうのは絶対イヤだ」

涼介なりに、恋愛観というものがある。いつも側にいて、空気のようになくてはならない存在。お互いにそれを意識したとき、恋愛が始まるのだ。勢いで付き合つて、良かったことなど一度もない。

「なんか、結婚相手みたいじゃん、それ。……憧れるけど」

敦司の彼女は、高校の後輩らしい。部活が同じだったと聞いた。付き合つて二年目に入るが、遠距離になつてしまつて寂しくないのだろうか。敦司はあまり、自分のことを多くは語らない。

「まあ、何がきっかけでどうなるか解らないから恋愛は面白いんだけどね」

相変わらず、十八の受験生が口にする言葉とは思えなくて、涼介は感心して部屋に戻つた。

初めてのレッスン

土曜日の午後二時。約束の時間にマンションを訪れた涼介は、慣れないタッチパネルを操作して、何とかインターホンらしきものを鳴らした。田舎育ちの涼介は、実家はもちろん、地元の友人宅も殆どが一戸建てで、オートロックのマンションを訪ねることなど初めてだ。しばらくして、入り口の鍵の開く音がして、恐る恐る、中に入る。背後で扉がロックされると、何だか捕われたような気分になり、逃げ出したくなった。

それでも負けるまいと、エレベータを見つけて乗り込む。六階のボタンを押して、破裂しそうな胸を押さえた。どうしてこんな目に遭っているのだろう。自分の意地っ張りが恨めしい。これなら、部屋で微分方程式を解いていたほうがよっぽどマシだ。

そんな涼介を乗せたエレベータは、あっという間に六階に着き、ゆっくりと開いた。意を決して外に出ると、驚いたことに、そこに奥村の姿がある。ゆるいクセのある長い髪を肩のあたりで一つにまとめ、気怠そうに、コンクリートの壁に凭れているが、今まで寝ていたようなジャージ姿でも見苦しくないのが不思議だ。

「ちゃんと来たんだ。意外」

挨拶もなしに、そのセリフ。最初からやる気を削がれる。ついて来いとも言わず、廊下を先に歩いて行ってしまっただけで、仕方なく追いかけた。彼の香水がまだ、涼介を惑わせる。本当なら、このドキドキは、女性の部屋を尋ねる時のものだったのに。無駄に、苦しい。このマンションは、想像していたより構造が複雑で、六階と言っても、そのフロアが更に二層に分かれている。エレベータを降りてから、また階段を上って、ようやく目的地にたどり着いた。東の角部屋だった。

「だから、むかえにきてくれたんだ」

鍵を開けている奥村の後ろで、涼介は呟いた。一人では、辿り着

けなかつたに違いない。奥村は何も言わず、玄関のドアを開け、涼介を中へ入れた。

広い部屋。大きな窓から射し込む光が、心地良い空間を作り出している。良い香りで満たされて、絶対に男性の部屋とは思えなかった。彼はソファの上に脱ぎっ放しのスーツを見つけて、それを奥の部屋へ投げ込み、涼介をそこへ座らせた。

しかし。さつきから、一言も喋らない。不機嫌そうにも見えて、かける言葉に迷う。どうしたものかと思いながら、広いリビングを見渡すと、東に面した壁にピアノがあった。川を挟んですぐ、寮の建物がある。どうりでよく聞こえるわけだ。

「……あのさ、男に教えるのがイヤなら、言つてよ。俺、帰るから。ホントは、弾けるようになっていいんだ。聴いてるだけで」

居たたまれなくなって、ついにそう言ってしまった。すると、奥村は初めて、困ったように笑う。

「ごめん。……低血圧なんだ。……今日は涼介が来るから、もっと早く起きようと思ってただけだ。……それに、二日酔い」

夜遊びも楽しじゃないよ、と呟く。じゃあ、やめればいいのにとは言えず、

「じゃあ、もう少ししたらまた来るよ」

「しばらく、何か話してれば、目が覚めるから。相手して」

そんな想定外の出来事から、涼介のピアノレッスンは始まったのだった。

「散々だな。それ」

バーベキューには間に合わず、土日は食堂も早く閉めるため、仕方なくコンビニの弁当を買って食べていた涼介に、敦司が同情の言葉をかけてくれた。

「それで金とるの?」

「さすがに、今日はいって。でも、先が思いやられるよ」

一時間近くも、低血圧の相手をさせられて、珈琲を淹れさせられて、ようやくレッスンらしきものが始まったのは、四時近かった。「しかもさ、途中で彼女から電話かかってきて、呼び出されたからってそこで終わり。何しに行ったか、解んないよ」

あんな男にも、彼女がいるなんて、信じられない。きつとまだ本性を知らないのだろう。

「最初から、バーベキューに来れば良かったのに」

そう言われて、悔しくなってくる。しかし、突如として始まったこのおかしな習い事を、すぐにでもやめようという気はなかった。その理由は自分にもサツパリ解らなかつたが、敦司が自分の部屋に戻って行ったあと、大きなトートバッグから、真新しい教本を取り出してみる。

「なんで女物のカバンなんか持つてるんだよ？ 紛らわしい」

「楽譜が入る大きさとて、男物じゃなかなかないんだよ。これが、丁度良いから」

ちゃんと理由があつたのだ。手ぶらで行つた涼介に貸してくれたのも女物のようだったが、色やデザインから、男が持つてもそれほど違和感はなかつた。彼なりに、気を遣つてくれたのかも知れない。目が覚めるまで相手をしてくれと言われて途方に暮れた涼介は、ふと思ひ立って、抱えていた疑問をぶつけてやった。どうして、髪が長いのか。どうして香水をつけているのか。騙すつもりなのかと尋ねると、

「じゃあ、涼介はなんで髪が短いの？」

「……長かつたら、おかしいだろ？ 似合わないよ」

「それと同じことだよ。僕は短い髪が、似合わないの。素直に納得しなくなつたが、確かにそつだ。」

「香水は、彼女にもらつたから」

完全な女物を贈るとは、相当変わり者か、それとも自分と同じ匂いじゃなきゃイヤ、というワガママなタイプかどちらかだろう。

「葉月って、本名？」

その質問に、奥村は大きく吹き出した。

『涼介って、本名？』

『なんだよ？ 答えるよ』

『八月生まれだから、葉月。涼介は、秋生まれなんだね、きっと』

間違いでなかった。涼介は十一月生まれだから。自分の名前の由来など考えたこともなかったが、今ようやく解った気がした。

『どうしたの。質問はもう終わり？』

黙ってしまった涼介の顔を覗き込んで、そんなことを言う。全く、悪気はないのだ。騙すつもりも、惑わすつもりも、全くない。そこに今度は腹が立ってくる。

『思い付いたら、また聞くよ』

涼介は慥然と言って、自分で淹れた甘い珈琲を飲み干した。

それぞれの生活

朝、目覚ましで起きて、顔を洗って、食堂で朝食。その十五分後には、予備校の椅子に座っている。午前の講義が終わると十二時きっかりに昼食を食べ、十三時から十七時半まで、また勉強、そして十八時から夕食。そんな軍隊のような厳しい生活でも、友人たちに恵まれているおかげで、何とか持ちこたえていた。人間というのは、同じことの繰り返しに飽きるのも早いですが、その単調な流れの中に、ほんの少しの変化を取り入れてやることで、退屈を遠ざけることができる。音楽で言うところの、転調や変拍子に当たるのだろうか。意外な出来事、突拍子もない出来事なら、なおさら効果が期待できる。

涼介は、全くそんなことを意識もせず、引き寄せられるように自ら生活の中に変化を取り入れた。当初の思惑が外れて、講師が男性というのは不本意だったが、それでも変化には違いない。慎重なほうだと思っていた自分が、どうしてあそこまで積極的になれたのか、それだけは今も不思議だったが。

「聞いてくれよ、マンションにすごい美人が住んでさ」
物理講師の村上の声だ。夕方の食堂で、同僚の講師に、興奮気味に語っている。

「背が高くて、スタイルも完璧。あれはモデルか何かだぜ、きつと何とか、お近づきになりたいよ」

すっかり、夢中になっているのが見て取れる。涼介は敦司と、顔を見合わせて笑った。村上が言っているのは恐らく、奥村のことだからだ。

「ホラ見ろ、間違えるのは、俺だけじゃないって解つただろ」
涼介は小声で自慢げに言った。それをすかさず、敦司が馬鹿にする。

「威張れることかよ。世界一、見る目がない二人かも知れないだろ」

なかなか信じてもらえないのが悔しかった。涼介自身も、彼に会うまで、美しいという言葉は女性のためだけに存在するのだと信じていた。しかし彼は、涼介が知っている人間の中で、間違いなく一番美しい。

村上は、彼の放つ気品とその希有な美しさを散々同僚に喋って、そろそろ彼女が帰ってくる時間だから、と食堂を出て行った。涼介が最初に見かけたのも、門限で玄関が閉まるギリギリの時間だった。「バカだな、あいつも。男だっていつ気付くだろう」

物理講師の退屈な日常にも、今は思いがけない波が立っていることだろう。性別が知れた時の落胆ぶりを想像して、また敦司と二人で笑った。

金曜日の夜、いつまでたってもピアノの音が聞こえないことに、涼介は苛立っていた。また、夜遊びをしているに違いないのだ。大人のくせに、酒の適量も解らないのか、と言いたくなる。しかし、社会人である奥村の、自由な生活ぶりが羨ましくもあった。誰に何を兼ねることなく、自分のやりたいようにやる。この受験地獄を終え、大学を卒業した暁には、そんな生活が待っているのだろうか。ふと、まだ臍げにも見えないほど先の自分の姿に目を凝らす。職業は？ 何処に住んでいる？

将来が不安なのだろうか。落ち着かない気分になって、涼介は窓の外に目をやった。今までに感じたことのない、あやふやな感情が、胸の中に生まれては消える。敦司の部屋で気を紛らそうかと思つた時、穏やかなメロディが流れてきた。例えば、金曜日に聞こえてくる曲は、穏やかで優しいものが多い気がする。今日はまるで涼介の不安定な気持ちを癒そうとしてくれているかのようで、思わず聴き入っていた。

弾き手が男性だと解っても、あんなに憎らしいことを平気で言う相手だと解っても、ピアノの音は優しく、繊細で、疲れた心に染みる。ピアノを弾けるようになれば誰でもそんな演奏ができるわけ

ではないことくらい、知識のない涼介にも何となく解っていた。奥村はもしかしたら、すごいピアノリストなのかも知れない。そんな気がしてきて、窓から顔を出し、彼の部屋のあたりを見つめる。

『どうして、ピアノやるうと思ったの？』

先日、涼介はそんな質問を投げかけてみた。

『家にピアノがあつて、気がついたら弾いてた』

何でもないことのように言う。

『そういうの、天才って言うんじゃないの？』

『まさか。母親が近所の子供にピアノ教えてたから、僕も一緒に習つてたんだよ』

最初はやらされてたかも知れないけど、やめようと思ったことは一度もない、と語る。『ピアノの音が好きだし、弾いてると幸せな気分になるから』

涼介はその言葉に、奥村のことを少しだけ、見直した。出会つてから良い印象は一つもなかったけれど、彼のピアノに対する愛情や熱意が、伝わってきたから。ただ投げやりに進路を決めて社会に出たのではないのだ。

聞こえるメロディが、変わった。まるで恋人のために弾いているかのように、愛に溢れているのが解る。言葉でなくても、表現する術はあるのだ。……ピアノが弾けるって、いいな。初めてそう思った。明日が楽しみだ。自分でも意外だったが、涼介はそう感じていた。

翌日、レッスンの時間ちょうどに、部屋のインターホンを鳴らした。すると、以前とは別人のように、笑顔で出迎えてくれる。服装も、ジャージよりももう少しマシな部屋着を着ていた。が、それも何だか女性もののようなデザインで、相変わらず、香水の匂いがする。また涼介の胸が、無駄にドキンと鳴った。

「ちよつとだけ、待ってて」

必死に平静を装う涼介をソファに座らせた奥村はそう言うと、こ

の間スーツを投げ込んでいた部屋に入って行く。しばらく経って、何をしているのかと気になり出した頃、何と女性を伴って部屋から出てきた。涼介が見ているのもお構いなしで、キスをする。涼介は、慌てて目を逸らした。

「気をつけて帰ってね。また、電話する」

長過ぎるハグのあと、彼女らしき女性は帰って行った。玄関のドアが静かに閉まった。

「お待たせ。さあ、こないだの続き、やろうか」

「……」

「何？ 今の人が誰か気になるの？ 彼女だよ」

「見れば解るよ」

「じゃあ、何」

見ている前でキスなんかするな、と言いたかったが、我慢した。

黙っていると、奥村は訳が解らない、というように肩をすくめ、ピアノの蓋を開ける。おもむろに、一つの鍵盤を鳴らし、

「これ、何の音？」

突然、尋ねた。

「D」

「正解！ すごいね、涼介」

褒められて悪い気はしないが、当たって当然だという気もする。

先週、Cから始まる音階を、これでもかというほど弾かされ、ピアノに背を向けて、音当てをさせられたのだ。記憶力が命の受験生の頭に、一週間も残っていなければ大問題だ。

普通のピアノレッスンというものがどういうものかは解らないが、涼介が想像するに、課題とする曲があって、それを自宅で練習してきて、翌週披露する。その出来映えに対して、講師が褒めたりダメ出しをしたりするのだ。しかし涼介の部屋には当然ピアノなどなく、それは不可能。こんなことで上達するのか、疑問だ。

「大丈夫だよ。涼介は別に、ピアノで受験しようとしてるわけじゃないんだから」

奥村は何でもなさそうに言う。

「涼介は本業の受験勉強をしつかりやって、その合間の息抜きでピアノに触れてるくらいの気持ちでいいんだよ」

ピアノに夢中になられて、受験勉強がおろそかになったって言われたら、困る。奥村はそんなことを言って笑った。

今日は、奥村に何も質問できなかった。最初から元気だったし、彼女が帰ってからは全てがスムーズで、非常にレッスンらしいレッスンだったから。涼介は、それはそれで何だか物足りなくて、もっと彼のことを知りたいと思う自分に戸惑いを隠せない。

「どうしたんだよ？ また恋の病か？」

食堂で、いつものように隣に座った敦司が顔を覗き込んだ。

「違うよ、ちよつと疲れただけ」

慣れないことをしたから、と、嘘をついてみる。確かに、勉強している時とは違う脳を使っているらしく、適度な疲労感が残っていた。

「でも、良いことだと思うよ。芸術的なことをするときには右脳が働くって言うし。俺たちみたいな詰め込みの勉強は左脳ばかりを使うから、バランスが取れるんじゃない？」

相変わらず、涼介にはない知識を披露してくれる。

「で、綺麗なお姉さんは、紹介してもらえそう？」

「……まだそこまでいってない。とりあえず、彼女は可愛かった」
目の前でキスをしていた。どうしても女同士に見えてしまつて、見てはいけないものを見ているような気分だった。今の涼介には、とても人前でそんなことをする勇氣はない。そもそもそんな相手もないのだったが、奥村の人目を気にしない大胆な行動や言動が、羨ましい。当たり前のことだけれど、未成年の自分とは住む世界が違うのだ。今はまだ心の何処を探しても見つからない感情や言葉も、大人になれば自然に身に付く？ 自分も彼の歳になれば、あんなふうに自由気ままに振る舞うことができる？ 涼介は、無性に彼と同

じ目線で世間を見てみたいと思った。しかし背伸びをしても、それは叶わない。彼らがいるところに辿り着く方法は、時間というどうにもならないものを経て行くしかないのだ。今まで同級生とばかり過ごしてきた涼介にとって、そのもどかしさは初めて感じるものだった。

それぞれの誤解

「ヤバイ」

月に一度の模試の結果を受け取った涼介は、思わずそう呟いていた。クラスの中だけでなく、全国にある同じ系列の予備校全体の順位が記載されているのだが、前回を大きく下回っているのだ。しかも、得意とするところの理系科目が、思うように伸びていないことも明らかだ。同じ書類が、実家の両親の元へも送られているため、小言の電話が怖い。

「他が頑張りすぎたんじゃないの？」

敦司は気楽なものだ。特に努力しているとは思えないのに、前回とさほど変わらない成績だったらしい。それに末っ子で、両親の過剰な期待もない。

涼介は、薄々、解っていた。息抜きのはずのピアノレッスンに、重点を置きすぎている。年上の女性と知り合いたいという下心から始めたことだったが、確実に上達しているのを肌で感じることは、想像以上の快感だった。それに、奥村は最初の憎らしい印象とは違い、レッスン中は熱心に教えてくれるし、上手く弾けた時はまるで子供に接するように褒めてくれる。この歳になって手を叩いて褒められることなど、たとえ物理で百点を取ったとしてもありえなくて、それが日頃受験勉強で疲れた心を癒してくれる。金曜の夜などは、翌日が楽しみで、勉強が手につかないのだ。

「これじゃダメだ。ピアノは、ほどほどにしよう」

自分に言い聞かせるように、涼介は呟いた。今までは何の関わりもなかったものを、再び生活の外へ追いやるだけ。それだけのことができないという現実に、自分はもしかしたら、とんでもない間違いを犯してしまったのではないかと思えてくる。

「そんなにハマるもんかね」

特に趣味もない、という敦司が、不思議そうに言った。

「まあ、勉強以外に興味がないっていうヤツよりは健全でいいと思うよ」

確かにそうだが、急激に成績が落ちたのも事実だ。敦司に慰められながら、夕飯のために食堂に移動し、他の友人たちの成績を聞いて引き続き落胆しているところへ、物理講師の村上がやってくる。

「村上先生、綺麗な女の人は、知り合いになれたの？」

秀子が声をかけた。

「それがさ……。なかなか会えないんだよ。こないだは、あと一歩だったんだ。マンションの玄関に、香水の匂いが残ってたから」

思い詰めた様子で、溜め息をつく。それで涼介はようやく、笑顔になることができた。

「まだ気付いてないんだ。あいつ」

「あとをつけて、告白するところ、録画したいよな」

想像するだけで可笑しい。男と解って呆然とする姿を、ぜひ眺めたいものだ。

「先生。そんなに綺麗な人なんですか？」

敦司がわざとらしく尋ねると、村上はよくぞ聞いてくれた、と言わんばかりに大きく頷く。

「もう、今まで見たことないくらいの美人なんだ。スラッとして、綺麗な髪で……。今どきあり得ないくらいの薄化粧なものだよな。カレシ、いるんだろうな……」

そう言っつて、頭を抱える。笑いを堪えきれないと思った涼介は、自分の手の甲を抓った。

部屋に戻った二人は、ようやく、爆笑する。他人の不幸は蜜の味と言っつが、本当にそうだ。涼介も自分の成績のことなどすっかり忘れて、笑い転げた。

「カレシじゃなくて、彼女がいるんだよ、バーカ」

「男が化粧なんてするかよ」

村上はもう一ヶ月以上も、片思いで苦しんでいるのだ。涼介自身も、初めてすれ違ったときは女性だと信じて疑わなかったし、何と

かして連絡を取ろうと奔走したから、気持ちは解る。それに奥村は色白で睫毛が長く、涼介でもたまに、化粧をしているように見えることがあった。しかし。笑いが止まらなかった。

予想通り、母親からの小言の電話に仏頂面をしていた涼介のもとへ、妹が遊びに来た。家族には当然、ピアノのレッスンを始めたことなど報告していないから、土曜日に来るのも、仕方がない。涼介は悩んだ挙げ句、体調が悪いからレッスンを休む、と奥村にメールを送った。

「ねえ、ねえ、買い物に行きたいの。連れてって」

妹の真央まおは三つ下の高校一年生。最近化粧を覚えたらしく、まず、異様な量の睫毛に驚かされた。

「おまえ、そんな化粧して学校行ってんの？」

「そっだよ？ みんな化粧してるよ」

まあ、そうなのだろう。しかし、男が意外と薄化粧を好きなことは、伏せておいた。そういうことは、自分で悟るべきことだと思っただからだ。

買い物と言っても、自分がそう買い物に出掛けるわけでもなく、勝手が解らなかつた涼介は、デパートやファッションビルが密集する辺りへ真央を連れて行った。田舎では見たことのない景色に、それだけで満足そうにしている。化粧品や雑貨を見つけるとすぐに駆け寄って行き、しきりにかわいい、かわいい、と声を上げた。

「あー。疲れた」

勝手にはしゃいで、勝手に疲れている。母親が、真央と買い物に行くと疲れる、とよく言っていたが、そのわけがようやく解った。本能のままに動くため、無駄な動きが多すぎるのだ。小さい頃はさぞかし大変だっただろう。ちよつと目を離れた隙にいなくなつて、しよつちゆうはぐれて泣いていたことを思い出す。

さすがに涼介も疲れてきて、休憩しようとして提案すると、真央は涼介の腕を引っ張ってドーナツシヨップへと入った。甘い香りに、そ

れだけで満腹中枢が刺激される気がしていると、携帯が震えた。奥村からの返事だ。

『大丈夫？ 勉強、頑張りすぎてない？ レッスンは、気が向いた時だけでもいいよ。ゆっくり休んで治してね』

ビツクリするほど、優しい内容だった。他の女子のレッスン生と間違えているのではないかとさえ思えた。そのせいで、何だか嘘をついてサボったことが、罪に思えてくる。奥村は、普段から傍若無人というか、思ったことを素直に口にする性格で、時々カチンとくるようなこともあったが、本来は優しい人間なのかも知れない。もしかししたら、涼介の緊張をほぐすためにわざとやっていることのようにも思えた。

「誰から？ カノジヨ？」

言いながら、携帯を覗き込もうとしてくる。涼介は慌てて画面を閉じた。

「カノジヨなんて、いないよ。クラスに女子が十人しかいないんだぜ？」

すると真央は途端に羨ましそうに、

「いいなー！ 私もそういうクラスに入りたい。女子って、いろいろ面倒なんだもん」

早くも何かを悟ったようなことを言う。

「絶対、男子とつるんでたほうが楽だよ」

そんな妹の言葉に、敦司の姿を重ねながら、涼介は甘いと解っているドーナツに手を伸ばした。

散々引っ張り回されたあと、帰る妹を駅で見送った涼介は、夕飯に間に合うように寮へ戻った。すると、同じクラスの友人が、待ち構えていたというように手招きしてくる。何があったのかと訝しんでいると、

「外から来た女子と出掛けてった、ってホント？」

「……まあ、ホントだけど」

「真子ちゃんが、泣いてたぞ。カノジョいるなんて知らなかった、
って」

「……」

留守の間に、相当面倒なことになっていた。敦司がいれば、代わりに妹だと説明してくれただろうが、今日は遠距離恋愛中の彼女とデートのため、涼介より早く出掛けていて、留守。別に、彼女がいるとかいないとか、真子に聞かれたことはなかったし、当然それを隠していたつもりもなかった涼介は、途方に暮れる。悪いことは何もしていないのに、悪者にされている雰囲気、耐えられなかった。「なんだ、妹だったのか」

女子の噂を、鵜呑みにするとこだったよ。夕飯を食べながら、友人たちは半ばガツカリしたように言った。

「最近、涼介が土曜の午後はどこかへ出掛けてくのも、女じゃないかって勘ぐってたぞ。ピアノだってことは、黙つといたほうがいいんだよね？」

それには大きく頷いた。女子の耳に入ったら、一瞬で予備校中に広がってしまう。それだけは避けたかった。

「まあ、真子ちゃんの件は、敦司から説明してもらおうなりしろよ。付き合う気がないなら、放つときや良いことだけだよ」

友人たちにはそう言われたが、涼介は自分で何とかすることだと判断し、夕食後、意を決して真子の部屋を訪ねた。どうやら泣いていたというのは本当のようで、目が赤くなっている。涼介の姿に驚いたような顔をした。今まで真子のことは、敦司たちが自分をからかうネタにしているのだと思っていたが、突如、信憑性を帯びてきて、何だか複雑な気持ちになる。

「ちょっとだけ、いい？ 何か誤解があったみたいだから、訂正しようと思つて」

何だか入試の問題文のようだと思いつながら、涼介はそう言った。

「さっきまで一緒にいたのは、妹だよ。実家からわざわざ遊びに来たって言うから、相手してたんだ」

真子の表情が、にわかには明らなくなった。続けて言おうとしている言葉を飲み込むべきかどうか一瞬迷い、

「それと、俺さ、……彼女とかいないし。大学受かるまで、作るつもりもない。色んなこと、いっぺんにできない性格だから、そのほうがいいと思うんだ。だから、」

わかった、と、真子が先を遮った。それなら我慢できる、とも言った。誰かに盗られてしまう心配がなくなったから、と。明らかに告白と取れる言葉に、ドキンと胸が鳴る。その痛みにも似た鼓動を堪えながら涼介は、ありがとう、とだけ言っつてその場を去った。

部屋に戻ってから、溜め息が止まらなかつた。また成績下がりそう。そんなろくでもないことを考えながら、穏やかに響くピアノの演奏に、耳を傾けていた。

ピアニストとは

心を入れ替えた涼介は、今までになく、講義に集中した。ホワイトボードに書かれたものだけをノートに写していたのを、講師が何気なく言った言葉まで、書き留めるようにした。自主的に勉強するということが、ここまで成績を伸ばすのかと驚くほど、涼介は順位を回復し、今度は母親からカンニングをしないかと疑われる始末だ。しかし気分が良かった涼介は、あれから隔週にしていたピアノレッスンを再び毎週に戻し、今日もこれから隣のマンションへ向かうところだ。

いつものようにタッチパネルを操作しようとする、中からちよつど、誰かが鍵を開けて出てきた。

「あ、」

思わず声を上げてしまう。それは、奥村の彼女だった。向こうも涼介に気付いて、愛想良く微笑む。

「こんにちは。今からレッスンでしょ？ 頑張つてね」

奥村と同じ匂いをさせて、通り過ぎて行く。小柄だが、スタイルの良い女性だ。屈託のない笑顔を向けるところも、奥村の印象に似ている。類は友を呼ぶ、という表現はおかしいのかな、と考えながらその後ろ姿を見送っていると、せつかく開いた鍵が閉まる音が聞こえ、涼介は再びタッチパネルを開いて、インターホンを鳴らした。最初は心臓が口から出そうなほど緊張したものだ、随分慣れたこの部屋。奥村は涼介の顔を見るなり、

「涼介は、甘いもの嫌いなんだっけ」

そんなことを尋ねる。涼介は頷きながらも、見慣れたはずの彼の容姿を凝視してしまった。今日はポニーテールのように髪を高い位置で縛っていて、これでは村上がいつまでも女性と思ひ込むのも仕方ないな、と少々呆れる。

「彼女が昨日ケーキ買ってきてさ。余つたから一緒に食べようよ」

「嫌いだって言ってるのに」

「大丈夫。ここのケーキ美味しいから」

今から涼介がケーキを食べることは、随分前から決まっていたことなのだろう。あらかじめ出してあった珈琲カップに、わざわざドリップした珈琲を注ぐ。

「たまにはこういうのもいいでしょ」

勝手に言っ、好きなを選んでいいよ、とテーブルの上にケーキを並べた。

「中学の頃、家庭教師のお姉さんが時々ケーキを買ってきてくれて、勉強の前にそれを食べながら少しだけ、話をする時間があつたんだ。あれはドキドキしたなあ」

奥村は懐かしそうに、そんな話をする。甘いものは嫌いだったが、その家庭教師のおかげで好きになつたらしい。

「それは、お姉さんだからだろ」

誰が男同士でケーキを食べてドキドキするんだ。涼介は心底、自分の不運を嘆いた。奥村が女性なら、そういうドキドキを毎週味わっていたかも知れないのに。確かにケーキは美味しいが、涼介は未だに不意だった。

不意ながらも、奥村と話していると、時間が経つのを忘れる。

彼との会話は他愛のない内容には違いないけれど、友人たちと交わすものとはまたひと味違って、新鮮だ。敦司のように社会人の姉がいれば触れることもあつただろうが、仕事を持っている者の心境は、まだ学生の涼介には想像できないものだから。それに、彼女のことを幸せそうに語る表情は、羨ましいを通り越して、涼介にまで幸せのお裾分けをしてくれるほどだ。それほどの幸せを、早く味わってみたいとも思う。何にしても奥村は、今までは受験しか見えていなかった涼介に、もっと先の楽しみがあることを教えてくれた。

今日も、随分時間が経ってしまった。そのことに気付いてお互いに顔を見合わせ、

「そろそろ、やる？」

「そうだね」

レッスンを始めて、三ヶ月。それなりに、指が動くようになってきた。片手ずつなら、小学校の頃に習った童謡や、有名な歌謡曲などは弾ける。多分、三歳児でも弾けるレベルの教材だが、できるようになるという達成感は嬉しいものだ。それに、相変わらず奥村は大袈裟に褒めてくれて、いつも気分良く帰ることができた。

『本気でピアニストを目指したいなら、そう言ってね』

奥村は帰り際、そんなことを言った。驚いていると、

『今は、涼介の息抜きになれば、と思っただけだから』

だから、珈琲を飲みながら他愛のない話もするし、教材も硬すぎないものを選んでいく。どうしてそんなことを言うのかと尋ねたら、意外な答えが返ってきた。

『涼介が、ちよつと本気に見えた。気のせいだったのかな』

その言葉がずっと、頭から離れない。自分自身も、良い息抜きだと思っていた。彼の部屋に行くたびに感じる、ちよつとした緊張感。ピアノの前に座る時の、模試の前とは全然違う、高揚感。そんな気持ちには、ただ予備校に通っているだけでは味わえないものだし、その心地良さは確かに感じていた。しかし、自分がピアノを弾くこと自体を好きなのかどうか、考えたこともなかった。

『ピアニストか……』

ピアニストとは何なのか、という涼介の問いに奥村は、ピアノを弾く人だよ、と当たり前前の答えを返した。大勢の観客の前でお金をとって演奏を披露する人もピアニストだし、目の前の、たった一人の恋人のために弾くのもピアニストなのだ。だから、ピアノが好きなら、誰でもなれる。さも簡単なことのように、そう言った。

部屋で英語の問題集を解きながら、涼介は借りっ放しのトートバッグに目をやった。本当のピアニストになるためには、もっと幼い頃からの英才教育が必要なはずで、受験生が片手間にレッスンを受けてなれるものではない。しかし、奥村が言ったように、ピアノを

弾く人になら、なれる気がする。

『I want to be a pianist.』

ノートの隅にそう書いてみた。中学の時の教科書にあったその英文は、その当時はパイロットになりたい、と言うのと同じレベルだと思っていた。しかし、考え方一つで、手の届くものになる。何でも難しく考えてしまいがちな受験生にとって、彼の言葉は目の覚めるような衝撃だった。

予想外の夏休み

予備校生にも、お盆休みという制度は存在していた。単に、講師たちの都合に違いないが、唯一帰省が許される四日間だ。と言つても、別に無理に帰省しなくても良くて、親元へ帰りたくない連中はずっと、寮で過ごしている。

「秀子さんも休みだからな。ここにいない意味がないよ」

全く、同感だ。休みでも門限は変わらないわけで、食事が出ないとなると、何の魅力も感じられない。涼介も早々と支度をし、帰路につく予定だった。ところが。

『お父さんとお母さんと、グアムに行つてきます。お兄ちゃんのおみやげはTシャツでいいよね？ また遊びに行つたとき渡すから、楽しみにしててね。真央』

そんな残酷なメールが、妹から届いた。受験生の息子を一人残して、海外旅行だなんて。酷い、酷すぎる。しかもまた遊びにくるなんて。何もかもが腹立たしくて、涼介は寮のベッドの上でもがいた。日頃から頑張っている自分は、一体誰がねぎらってくれるのだろう。悲しくなってきたとき、再びメールの音。大方、母親からだろう。浮かれたメールを見なくなかったが、仕方なく、携帯を開く。

『今、何してるの？ これから海でバーベキューをするんだけど、暇だつたら来ない？』

それも、全く思いがけないメールだった。涼介はすぐに、行く、と短い返事をして、部屋を飛び出した。

「急に誘つてごめんね。予定、あつたんじゃない？」

その言葉に、涼介は大きく首を横に振った。家族に置いてけぼりを食らったことを話すと、奥村は可笑しそうに笑う。

「そっか、じゃあ丁度良かったんだ。門限も気にしないでいいしね？」

「それが、門限だけはあるんだよ。面倒くさい、」

「帰らなきゃいいでしょ？ 今日も、明日も、明後日も」

全く、突拍子もないことを言う。門限というのは、帰る予定の者に課せられた義務であって、帰らないなら適用されないのだと。

「それもそうだね」

もう、どうでも良くなった涼介は、その大胆な意見に同意した。

何より、今から音楽仲間の友人たちも集まってくると言う。綺麗なお姉さんも来るらしく、そっちのほうが一番大事だった。

「なんか、いつもと感じが違う」

「海だからね」

奥村の服装はいつも、部屋着にしてもかなり女性的で、見慣れても戸惑ってしまうようなものが多かったが、今日はノースリーブの重ね着に、ミリタリー調のカーゴパンツ、それにビーチサンダルという軽装だ。スーツだと、胸がなくても膨らんでいるように見えてしまうときがあつて、何度も奥村を女性なのではないかと疑つたものだ。しかし今は確実に男性だと認識できて、ホツとしたような、残念なような、複雑な気分だった。

やがて友人のワンボックスが二台迎えにきて、涼介たちはその片方に乗り込んだ。奥村と同年代の人ばかりかと思いきや、小さな子供連れもいれば、結構な年配の夫婦もいる。一目で綺麗なお姉さんだと解る人物を見つけたはいいが、よく見たいのに自制心が邪魔をしてあらぬ方向に目をやった。何にしても知らない人ばかりで少々緊張していると、

「紹介するよ。この子が、新しいレスン生の宮間涼介くん。予備校生、でいいんだよね？」

紹介されるままに、頷いた。他に、同じ職場の講師たちと、声楽家、バイオリン奏者など、音楽にかかわる仕事をしているメンバーとその家族だ。で、あと一人は、連れてこられたらしい、女子高生。一番後ろの席で、窓に凭れて眠っている。ところが、車が走り出すと、

「私が、同い年の子がいないなら行かないって言ったから、あんた

が呼ばれたのよ」

突然、耳元でそんなことを囁いた。どうやら自己紹介を避けるための狸寝入りだったようだ。涼介は自分が誘われた理由に納得しながらも、

「いくつ？」

「十六」

妹の真央と同年だった。

「俺、今年で十九なんだけど」

そこは、ハッキリさせておきたい。それなのに彼女は、

「そんなの見た目が変わんなければ、一緒よ」

不機嫌に言っつて、窓の外に目を向けた。……感じ悪い。初めて妹のほうが可愛く思えて、涼介も反対側の窓に目をやった。

浜辺につくと、もう薄暗くなつてきていた。遊び慣れているらしく、バーベキューの準備も手際が良い。涼介は、ただ感心して、その様子を眺めていた。持ち寄ったバーベキューセットを組み立てて、木炭を並べ、まず新聞紙に火を点ける。それが全体に行き渡ると、赤々と木炭が燃え始める。もう、それを見ているだけでワクワクした。

「涼介、ビール飲める？」

何処から声が出たのかとキョロキョロしていると、頭の上から缶ビールが差し出された。

「あ、ありがとう」

いつも寮の部屋でコソコソとしか飲めない立場の涼介は、公の場で飲めることが何だか嬉しい。奥村はレジャーシートを広げて、涼介をそこへ座らせると、自分も隣に腰を下ろした。

「手伝わなくていいの？」

さつさと缶ビールを開けた奥村に、尋ねた。

「いいの。指を怪我するといけないから、免除されてるんだ」

そう言われてみると、準備をしているのは、楽器に関係のないメ

ンバーばかり。それでようやく、奥村が真剣に音楽を生業としてい
ることが知れた。今まで、他愛のない話はするものの、仕事の話は、
あまり聞いたことがなかった。

「リコちゃんも、おいで。ビールが良かったら、飲んで良いんだよ
?」

リコと呼ばれたのは、さっきの女子高生だ。離れたところで恥ず
かしそうに首を横に振りながら、ジューズでいいです、と答える。
あまりに態度が違いすぎて、驚いてしまった。

「リコちゃんも、僕のレツスン生だよ。もう三年目くらいかな。可
愛いでしょ」

真剣に答えづらいことを聞いてくる。ハッキリ言って、可愛さの
欠片も感じていなかったが、仕方なく、頷いた。

やがて集団の誰かに呼ばれて奥村が走っていくと、離れたところ
に一人で立っていたリコが、側にやってきた。今まで奥村が座って
いたところに座って、s

「随分可愛がられてるみたいね。葉月先生に」

好戦的な態度は、変わらない。お気に入りの奥村の前でだけ猫を
被っている、たちの悪い女子高生なのだ。

「私、本当のライバルは、月子つきこさんじゃなくて、あんただと思っ
てるから」

突然、意味不明なことを言い出して、涼介を睨みつける。何のこ
とだかサツパリ解らなくて、目を逸らした。

「男なんか、絶対負けないわ」

そう言い放って、リコはどこかへ行ってしまった。ホツとして残
りのビールを飲み干し、何か手伝うつもりで立ち上がる。大人数の
騒がしさに引き寄せられるようにして歩いて行くと、

「ホラ、焼けたよ。いっぱい食べて」

奥村の彼女が、紙の皿に肉や野菜を乗せて、渡してくれた。左利
きの人が箸を使うのを見ると、いつも感心する。

「若い子が来るって言うから、お肉を三人前、余分に買ってきたの

よ？ だから遠慮しないでね」

年配の婦人が、その声をかけてきた。一人の女子高生を除けば感じのいい人ばかりで、来て良かったとようやく笑顔になる。自分でも気付いていなかったが、幼い頃の人見知り、時々顔を出すのだ。「あ、やつと涼介が笑った」

奥村がからかうように言う。観察されていたことが恥ずかしくなつて彼を睨むと、さっきの年配の女性が、

「知らない人ばかりのところに連れてこられたのに、愛想が良くて偉いわ」

それに引き換え、ウチの娘は、と辺りを見渡す。リコはこの女性の娘だったのだ。

「リコちゃん、何処行つたんだろ。僕、探してきます」

奥村はそう言つて、飲みかけの缶ビールを涼介に渡し、走つて行つてしまった。

「君が奥村くんの新しい生徒か」

年配の男性のほう、声をかけてきた。

「随分筋が良いって聞いたよ」

信じられない台詞に驚いてしまう。お世辞にしても、奥村が自分のことをそんなふうと言つたなんて。何も言えずにいると、彼は奥村が走つていったほうを目で追いながら、

「あの子は天才肌なのに、驕つたところがなくて、本当に気立てがいい。うちのわがままな娘が心を開いてるのは、奥村くんだけなんだよ」

聞くと、奥村が子供の頃にピアノを習っていたのが、リコの父親だったらしい。どうしても娘にピアノを弾かせたい両親だったが、反発して触れようとせず、あきらめていたときに、奥村に再会した。

「ピアノを教える仕事をしたいと言うから、娘を任せてみた。そして、あれほど嫌がっていたピアノを、弾くようになったんだ」

嬉しそうにそう語つた。何も知らなければ感動的な話なのだろう

が、リコの下心を既に見抜いていた涼介は、その浅ましさに辟易した。幾つの時か知らないが、ピアノをダシに使って奥村と親しくなるうとしたことは、確かめるまでもない。

やがて奥村がリコを連れて戻ってきて、勝手な行動を母親が咎めようとするなり、あからさまに不機嫌な表情でその場を離れて行った。娘の失礼を詫びる母親に、奥村は、

「反抗期なんですよ、きつと。僕もそういう時期、ありましたからね、涼介」

何故か涼介に同意を求めてきて、仕方なく、頷いた。高校に入ったら治まったが、涼介にも反抗期らしきものがあつたのは事実だ。食事中も一切家族と口をきかず、携帯の画面ばかり眺めていた。

「ホラ、もつと食べな。ここの皆は飲むばかりで食べない連中だから」

大方は、既にレジャーシートの上に移り、思い思いの飲み物を手に談笑を始めている。その中でも、一人離れたところにいるリコに気付き、奥村は皿に食べ物を乗せて運んで行った。

『放つとけばいいのに』

心の中で思う。しかし、易々と意中の人の気をひく術に感心してもいた。遠隔操作など、男子には持ち得ない能力だからだ。

『いや、持つてるヤツもいるか』

ピアノの音に引き寄せられたこと。あれも立派な遠隔操作だ。毎晩、誰が弾いているのか知りたくて、たまらなかつた。

「涼介くんは、どうしてピアノを始めようと思ったの？」

突然尋ねられ、我に返る。

「あ、まだ自己紹介してなかつたね。私、緑川月子。子供たちにバイオリンを教えるの」

この人が月子だったのだ。バイオリン、ということとは、さっきのリコの言葉が何を意味するのか、ますます解らない。楽器が違うのに、ライバルになりようがないではないか。

「葉月がね、涼介くんのこと、すごく褒めるのよ。それほど教えなくてもほとんどん上手になるって。ご家族に、音楽関係のお仕事をされてる方がみえるの？」

全く想定外のセリフに、涼介は思わず吹き出した。実家にある楽器と言えば、小学校の時のピアノ二カと、リコーダーくらいだ。カステネットとオカリナもあつたかも知れない。そう打ち明けると、月子もリコの両親も笑う。

「それだけあれば立派よ。ちゃんと音楽になるもの。私はオカリナの音色も好きだわ」

オカリナは音の出しかたが難しい、という話になる。リコーダーすら難しかった涼介にはついていけないくて、ポカンとしていたら、葉月は本当に面倒見がいいし、生徒の区別なんてしない人だけど、涼介くんだけは違う気がするの。だから、気になって」

特別扱いが、羨ましい。月子は少々、恥ずかしそうに言った。

「月ちゃんと葉月くんは、小さい頃からホントに仲が良いわね」

二人を子供の頃から知っている、というリコの母親の言葉に、ますます顔が赤くなる。そうか。二人は幼なじみなんだ。年上にもかかわらず、可愛い、と思った。リコなんかより、何倍も可愛い。未だに奥村を独占している様子をチラツと横目で見ると、月子のほうはさすがにリコをライバルだとは思っていないようで、気にしている様子もない。所詮、リコが入り込む余地などないのだ。

涼介は何だか気分が大きくなってきて、二本目のビールも飲み干した。月子は未成年の飲酒を咎めることなく、お酒強いのね、と感心したように言う。

「教えてくれないの？ ピアノを始めた理由、」

そんなに気になるのだろうか。恥ずかしいからはぐらかすつもりだったが、酔いの回ってきた涼介は、つい、本当のことを口にしてしまった。

「毎日、聞こえてきたんだ。すつごく上手なピアノが。今まで聴いたことないくらい、情熱的で、聴いてると、癒される。次は、どん

な人が弾いてるんだろうつて、気になって。どうしても会ってみたくなったから」

まるで魔法にかかったようになってしまっていたこと。

「素敵な魔法にかかったのね。……その魔法は、解けることがあるのかしら？」

その質問の真意も知らず、涼介はこう答えた。

「ううん。多分、解けないんだ。ずっと」

今も夜になると、彼のピアノに耳を傾けていること。不思議な力で心の中まで入り込み、涼介の心を癒してくれる。その力は、魔法以外の何ものでもないと思った。

初めての外泊

夜も更け、レジャーシートの上で転がって眠り出す連中が出てきた。先に帰る女性陣とリコの家族を乗せた車が出て行くと、ようやく静かになった浜辺で、ホツと息を吐く。思いがけなく連れ出されてこんなところに来たが、寮に一人でいるよりずっと良かったと、心底思っていた。とつくに門限の時刻も過ぎていく。

「今日は来てくれてありがとう」

いつの間にか側にいた奥村が、そんなことを言った。

「……あいつがワガママ言ったからだろ？ 別にいいよ」

「何のこと？」

とぼけているのか、首を傾げる。

「リコだよ。同級生がいなきゃ行かないって言ったんだろ？ だから俺を呼んだって。自分でそう言った」

すると、奥村は驚いたような顔をしたが、やがて可笑しそうに吹き出す。

「違うよ、僕が誘いたかったから、誘ったんだよ。確かに、知り合いがいないから行きたくないって言うてるとは聞いたけど」

「……そうなの？」

「そうだよ。涼介と、早く打ち解けたくて」

意外なことを言っつて、涼介を座らせ、自分も隣に座る。知り合っつて三ヶ月にしては、打ち解けていると思っつていたが、彼はそう感じていなかったようだ。

「だって、まだ僕のこと、まともに呼んでくれないし」

さっきは会ったばかりのリコちゃんを、リコって呼んだくせに。言われて、思い当たった。先生、と呼べば良いのか、奥村さん、と呼べば良いのか解らず、声をかける時にいつも困る。まるで倦怠期の夫婦のように、ねえ、とか、ちよつと、と呼んでいた。

「葉月って呼んでよ」

「え、呼び捨て？」

「うん。皆そう呼ぶし。そのほうが、やりやすい」

それほど酔っているようには見えないから、多分本気なのだろう。涼介は戸惑いながらも頷いた。年齢を聞いたことはなかったが、こんなに歳の離れた知り合いは当然いなくて、呼び捨てにするのは何だか気がひける。

「あのさ、それと気になったんだけど」

さっきの月子の言葉を思い出した。

「俺のこと、過大評価して言うの、やめてくれない？ 絶対才能なんてないんだから」

それに初対面のリコまで自分をライバル視しているようだったし。奥村は再び驚いたような表情になった。アルコールのせいでピンクに染まった頬が、ますます彼を女性的に見せている。もういい加減に慣れたいのに、心臓がドキンと鳴った。

「そうかな、僕はあると思うけど」

その真剣な表情に、奥村の自分への評価が本当に高いのだということを知る。涼介はそれが何だか怖くて、それ以上は何も言えなかった。

目が覚めたとき、涼介はそこが何処だか解らずに戸惑った。一面の、薄紫色の空。心地良いそよ風。すぐ側に、驚くほど綺麗な寝顔があつて、息が止まりそうになる。繰り返す柔らかな波音が、少しずつ、夕べの記憶を運んできた。自分がどれだけ飲んだのか思い出せないが、何やら奥村と喧嘩をしたような記憶だけが残っている。しかし、その原因も内容も、全く思い出せなかった。ただの夢だったのかも知れない。

『マジで外泊しちゃったよ』

少しの罪悪感は、大きな心地良さでもあつた。自分を放って海外へ出掛けた家族に、今は感謝したい気分で起き上がる。同じシートの上に、数人の大人がまだ寝息を立てていた。彼らには罪悪感など

微塵もないのだろう。この自由さと開放感が、羨ましい。夜、家にも帰らず外で寝るなんて、到底許されないことだと思っていたのに。こんなに朝早くに目覚めたのは、いつ以来だろう。波打ち際に佇んで、考える。小学校の頃、カブトムシを捕りに森へ出掛けたときも、日の出前だった。どうしてもオスのカブトムシが欲しくて、夢中になっていた頃。結局、クワガタしか捕れなかったな。ガツカリしたけれど、それを飼っているうちに、愛着が湧いてきた。死んでしまった時は、泣いて庭に埋めたことを思い出す。あの時のように夢中になれるものが、今の自分にあるだろうか。なくしたとき、涙を流すほどの存在が、今の自分にあるだろうか。その答えを探すことが何だか怖くて躊躇っていると、後ろから声がした。

「涼介、おはよう」

隣に奥村が並ぶ。おはよう、と返事をしながらも、何だかまだ夢の中のようで、ジッとその横顔を見つめた。文句なしに美しく、まだ女性に見える。それに、いつもより優しい香りがした。知らなかったが、香水というのは時間とともに香りを変えるものが多く、付けた時と数時間後では、全く違う香りがするらしい。普段は薔薇の花のような香りなのに、今はふんわりと包むような、それこそ女性らしい香りだった。

「低血圧のくせに、早起きじゃん」

戸惑いを隠すために、涼介はそんなことを言った。彼は可笑しそうに笑いながら砂浜に腰を下ろす。涼介もそれにならった。

「昨日はごめんね」

「何が？」

「覚えてないんだったら、いい」

「気になるよ、」

どうやら喧嘩をしたのは事実のようだが、本当に何も覚えていなかった。実際に謝らなければならぬのは、涼介のほうかも知れないのに。もう一度記憶の糸を辿ってみたが、やはり何も見つからなかった。

「夢の世界みたいだね」

奥村は膝を抱え、明るくなってきた水平線の彼方を見つめて言った。

「朝の海って、好きなんだ。すごく、幻想的で、」

「俺は、朝の海って始めて見た。海のないところで、育ったからだから、海へ行くというのは、涼介にとって特別なことだった。ないものに対する憧れがあった。」

「ねえ、葉月って、いくつ？」

「ずっと知りたかったことの一つ。」

「昨日、二十五になった」

「え、誕生日だったの？」

嬉しそうに、頷く。八月生まれだから、葉月。そうか、これは、バースデーパーティだったんだ。そんなことは一言も言わない奥村が、何だか自分と変わらない意地っ張りに見えて、始めて親近感を覚える。

「ケーキ食べなかつたじゃん」

「食べたよ。涼介が泣きながら寝ちゃったあと」

「え」

からかうように笑う。全く記憶になかったが、涼介は恥ずかしくなって、俯いた。

「嘘だよ、泣いてたのは、僕のほう。あんなに泣いたの、久しぶりだった」

清々しい笑顔を向けられて、勝手に抱えていたわだかまりが解けてゆく。最初からこの人には、裏も表も、なかった。

「なんで泣いてたの」

「それは、内緒」

「何だよ、もう」

自分との喧嘩が原因だろうか。それだけが気になったが、教えるつもりはないらしい。涼介は自分の記憶力に期待して、いつかそのシーンが姿を現してくれることを願った。

あの夜の記憶

楽しいお盆休みはあっという間に過ぎ去り、涼介は再び、講師の声の響く教室にいた。表向きは帰省していたことになっていて、敦司ですら本当のことを知らず、その秘密が心地良く感じられる。綺麗なお姉さんとはさほど親しくなれなかったものの、奥村との距離が縮まったことを実感できるだけで、何だか充実した時間を過ごした気分だった。

浜辺でのバーベキューのあと、一旦寮に戻って着替えをバッグに詰めた涼介は、再び奥村の部屋に上がり込んだ。シャワーを借りて汗を流し、少し昼寝をするつもりで横になったはずが、疲れていたのか、目覚めたら夕方になっていた。普段寮にいたら絶対に許されない自由気ままな大人の生活を、今だけは味わえる。そう思うだけで楽しかった。

『今から、ドライブに行こう。渋滞を避けて、ナビ任せに走るんだ。けっこう、面白いよ』

昨日のメンバーの中から都合の合う者が集まって、一台のワンボックスにまとまった。

『あれ、月子さんは？』

『ああ、……今日はちよつと、用事があるって』

その場に一瞬流れたおかしな空気に、気付かなかったわけではなかった。触れないほうが良いと悟って、いつになく不自然な笑顔に、誤摩化されておいた。

『涼介？ どうしたんだよ？』

ハッと我に返ると、敦司が側に立っていた。いつの間にか午前の授業は終わっていて、皆ゾロゾロと教室を出て行く。涼介も慌てて教科書を仕舞い、席を立った。

『ボーツとしちゃって。また恋の病か』

『地元で、同窓会とかあったんだろ。初恋の人に会って、盛り上が

ったパターン、」

勝手な想像で喋る友人たち。涼介は首を横に振った。

「そんないいこと一つもなかったよ」

あまりに楽しかったことが顔に出てしまいそうで、涼介はそれ以上の追求を逃れるため、早々と昼食に手を伸ばした。そして、矛先を変える。

「敦司はどうだったんだよ？ 彼女とは続きそう？」

「うん。いまのところはね。向こうも受験生だからさ、余計なこと考える暇、ないんだろ」

相変わらず冷静だ。この男が彼女とどんな時間を過ごしているのか、時々見てみたくなる。

受験生にとって、折り返し地点の夏休み。ここからもっと集中して成績を上げて行かなくてはならない。本当に、余計なことを考えている暇はないのだ。大人たちと過ごした四日間の休みで、受験生の気持ちをすっかりリセットされていた涼介は、これまでの自分を取り戻そうと、必死で休み前のノートを眺めた。

「全然、彼女と喋んなかったじゃん。喧嘩でもしたの？」

「……、そんなんじゃないよ」

政治経済の講義をBGMに、突然あの夜の記憶が甦ってきた。理系の涼介にとって文系の科目は、センター試験で必要だと解つていても、どうしても興味が持てない。講師の声はいつしか遠くを流れる雲と化し、涼介の意識から消えていった。

「あ、もしかして、付き合ってること、内緒とか」

口の前に、人差し指を立てて、懇願するような顔になる。どうやら図星のようだが、こんなにも打ち解けた仲間内で、それを秘密にする必要性も、その心理も、解らなかった。

「もうちょっと、飲もうよ。ビール、まだ残ってるし」

話題を振り切るかのように立ち上がり、涼介にビールを勧めた。

涼介には、その逃げるような態度が気に入らないが、黙ってそれを

受け取る。

『でも、ホントに涼介は筋がいいよ。音感もしっかりしてるし、ピアノに限らず、音楽が向いてるんじゃないかな』

そんなことを言われたのは、始めてだった。小学校から高校まで、音楽の授業はあったが、それほど良い成績をとったことは一度もなくて、適性があるかどうかなんて、考えたこともなかったのに。話を逸らされたことに気付いていたけれど、追求されたくないであろうことをそれ以上つくほど、涼介は子供ではなかった。

『葉月だって、才能あるんだろ？ さつき、リコのお父さんが言っていたよ。天才肌だって』

『そんなわけないよ。今日は特別に、褒めてくださっただよ。優しい先生だから』

『謙遜しちゃって、』

寮に入ってほぼ毎日、彼のピアノを聴いてきた自分に、音楽の才能があるかどうかは解らないが、彼のピアノが素晴らしいことだけは確かだ。楽器からではなくて、心の中から音が出ているような、そんな情熱が伝わってくるから。

『毎日、どうやって曲を選んでのの』

『その日の気分』

『ふうん。じゃあ、悲しい気分には、ならないんだね』

『……どうして？』

『そんな曲が聞こえてきたこと、なかったから』

穏やかな夜の海や、月光を連想させるものはあつたけれど、悲しみを表現したような重々しいメロディは、一度もなかった。それどころか、甘くて、情熱的で、今思えばそれらは全て、側で聞いている月子のため。奥村の、彼女への愛情がどれほどのものか、思い知らされる。

『そうだね。悲しいとは、思いたくないね』

それは悲しいと言っているのと、同じだよ。その涼介の言葉に、奥村は一瞬だけ、真剣な表情を見せたが、すぐに笑い出した。

『社会に出れば、いろいろあるんだよ。涼介にも、そのうちわかるよ』

話の中身がすり替わったことに気付かないほど、涼介は幼くも、酔ってもいなかった。さつきからずつと、話の中核から逃げるような態度の奥村に、だんだん苛立つてくる。涼介は、開けたばかりの缶ビールを、一気に飲み干した。

『大人つてさ、そうやってうまいこと、誤摩化すんだよね』

『……』

『悲しいなら悲しいって、言えはいいじゃん。好きなら好きって、言えはいいじゃん。何で隠すの？ 何のため？』

いつも思ったことをストレートに口にするとところが好きだった。裏表がなくて、憎らしいほど潔い。そんな奥村が、なぜ彼女との関係を隠すのか。涼介にはそれが、腹立たしかった。何より、彼女に失礼な気がして。

もう何年も味わったことのない痛みが、頬に残った。涼介を叩いた左手を握りしめ、痛いほどに見つめる奥村の瞳から、涙が零れた。そして、彼の腕が涼介の体を、抱きしめた。

『叩いて、何で泣くんだよ？』

彼は何も言わず、ただ涼介に抱きついて泣いていた。まるで、子供のよう。

解けない問題

次の土曜日、涼介は何事もなかったように振る舞う自信がなくて、携帯を弄びながら時刻が迫ってくるのを待っていた。彼の抱えている悲しみのわけは解らなかったけれど、涼介が泣かせてしまったことに変わりはない。彼の女性的な容姿のせいで、それが何だか大罪に思えて、落ち着かないのだった。

迷いが生じたせいで、時間より少し遅れてインターホンを鳴らすと、奥村はいつもと変わらぬ笑顔で出迎えてくれた。昨夜、ピアノの音が聞こえなかったから、また夜遊びをしていたのだろうと想像していたが……。何より、僅かなわだかまりもなくて、拍子抜けしてしまう。

「ちよつと待っててね」

いつものようにソファに涼介を座らせて、寝室へ入って行く。

『またか』

涼介は軽く溜め息をついて、その扉から目を逸らした。

『俺が来るって解ってたんだから、先に帰しとけよな』

一秒でも長く一緒にいたい、ということだろうか。それはそれで羨ましくもあり、まだそんな経験のない自分を幼く思う。やがて扉が開き、囁き合う声が聞こえたあと、月子の気配が玄関の外に消えた。

「お待たせ！」

妙に上機嫌の奥村は、また彼女がケーキを買ってきたのだと言って、珈琲を淹れ始めた。

「涼介が来るって知ってるから、涼介の分も頭数に入れてるみたい」
今度会ったら、甘いものは嫌いだと伝えよう。涼介はそう心に決める。二人で珈琲を飲みながら、ふと会話が途切れ、涼介は先日のことと謝ろうと、奥村の表情を窺ってみた。普段は、悲しみなど微塵も見せない。何の悩みもなさそうに、明るく振る舞っている。そ

れが努力してのことだったとは、思いもよらなかった。

「そういえば、こないだのこと、思い出したんだ」

「こないだのことって？」

とぼけているのか、奥村は首を傾げてみせる。涼介は構わず続けた。

「俺が多分、無神経なことと言って、葉月が傷ついたんだよね。ごめんね」

「……」

黙って、涼介の顔を見つめている。未だに、女性に見つめられているような気がして、ドキツとした。睫毛が、長い。

「謝ることないよ。涼介が言ったことは、ホントのことだから」

それより、涼介を叩いた僕のほうが悪い。そう言って謝る。美しい瞳が悲しみに揺れ、また泣き出すのではないかと思えた。

「頭では解ってるんだ。でも、心も体も、言うことをきかない。どうすればいいのかも、解らない」

そう言って、困ったように笑う。こんなにも美しく、悲しみとは無縁であるかのような彼の身に、どんな深刻な問題が存在しているのか。話してくれなければ、涼介には知る術もない。想像もつかないことだったが、何とか解決してほしいと思った。

「とにかく、何も知らずに色々言ってごめん」

これで、ようやく肩の荷が下りた気分になった。それを悟ってか、奥村が可笑しそうに笑う。

「良い子だね、涼介は。こっちこそ、気を遣わせてしまって、ごめんね」

頭を撫でられて、涼介は思わず、奥村を睨んだ。顔が熱い。

「こ、子供扱いするなよ！」

「あはは、可愛い」

涼介は腹を立てながらも、すっかりいつもの調子に戻った奥村に、ホツとしていた。

「付き合ってる相手のことを皆に内緒にするのって、どういう時だろう」

レッスンが終わり、どうしても気になった涼介は、友人たちに質問を投げかけてみた。本人に聞けなかったからだ。

「二股とかだろ。それか友達の彼女を盗ったら言えないんじゃない？」

「大人だったら不倫とかね」

「不倫って何か良い響きだよな」

他人事だからだろうが、話はすぐに逸れていき、いつかは年上の人妻と付き合ってみたい、と誰かが言い出した。涼介が考え込んでいると、

「同性愛とか？」

敦司が言った。ドキン、と心臓が大きな音をたてる。

「……それもあるね」

選択肢は、少ないのに。センター試験よりはるかに簡単そうなの問題を、涼介はまだ解けない。

「俺たちに内緒で、言えない相手と付き合ってるの？」

からかうような表情に、涼介はようやく表情を和ませた。

「違うよ、俺じゃなくて、」

「ピアノの先生？」

敦司には何でもお見通しのような。涼介は降参して、頷いてみせる。奥村の名誉にかかわることだと思い、泣いたことは伏せておいたが、相当深刻であるということだけ、話した。

「彼女のほうが結婚してるんじゃないの？」

「そうなのかな……。週末、しょっちゅう泊まりに来てるのに？」

「結婚してたらそれは無理だな」

二人で顔を見合わせ、考える。同性愛？ その可能性を、完全に否定できない自分がいた。確かに、バーベキューのときの服装で、一度は彼を男性だと確信したはずだった。しかし、彼の美しすぎる容姿が、その記憶を曖昧にしてしまう。彼がもし、女性だったら。

涼介はついにそれを想像してしまって、胸が苦しくなるのを感じた。女性だったら良かったのに。最初に抱いたその単純な気持ちは気付かぬうちに姿を変え、今再び涼介の中に現れた。

「午後の授業、始まるぜ」

敦司の言葉に我に返った涼介は、全ての憶測と自分の感情を振り切って、立ち上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6014x/>

ピアノレッスン

2011年11月10日17時15分発行